2 第2章 弟子屈の観光が抱える課題の全体像

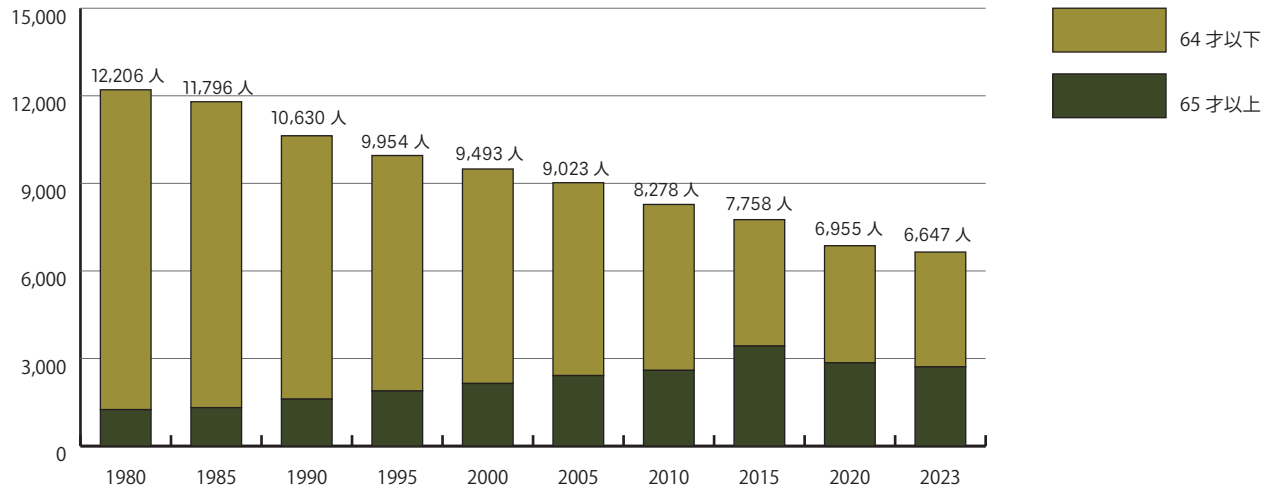
数値から見る観光の現状

課題 1

弟子屈町の人口は、1980 年には 12,206 人を記録しましたが、その後減少の一途を辿り、2023 年末時点では 6,647 人と半数近くまで落ち込んでいます。一方で、65 歳以上の人口比率は上昇し続けており少子高齢化が進行しています。このような状況のなか、観光産業がしっかりと担い手を確保することも重要な取り組みのひとつです。

観光産業を支える「担い手」の確保と育成

【表 4】弟子屈町における人口推移



人口構成の変化によって、弟子屈町の重要な産業である観光産業も「担い手・働き手の不足」という深刻な課題に直面しています。担い手の不足は地域ならではの質の高いサービス提供を困難にするだけでなく、豊かな地域資源の保存・継承を危うくする大きな要因となっています。

持続可能な観光地域づくりの担い手確保を、単なる労働力対策に留めず、観光をきっかけとした若年層の地域への流入を促すことは、町全体の少子高齢化対策への貢献となります。

交流人口（こうりゅうじんこう）/ Exchange population

交流人口とは、その地域に訪れる人々のこと。その地域に住んでいる人（定住人口又は居住人口）に対する概念である。その地域を訪れる目的としては、通勤・通学、買い物、文化鑑賞･創造、学習、習い事、スポーツ、観光、レジャーなど、特に内容を問わないのが一般的である。

関係人口（かんけいじんこう）/ Related population

関係人口とは、その土地に住んでいる、または移住した「定住人口」ではなく、観光などで訪れた「交流人口」でもない、居住地と離れた地域を行き来して、地域の人々と多様に関わる人々のこと。

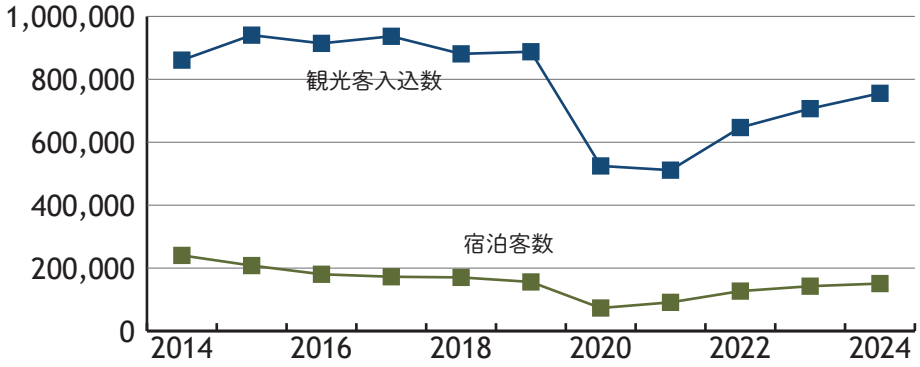
出典：JTB 総合研究所

課題 2

横ばいが続いていた弟子屈町を訪れる観光客数は、コロナで一時的に減少したものの、2022 年から着実に回復をみせています。持続可能な観光地をめざすためには、宿泊客・長期滞在客を増やしていくことが 必要であり、受け皿となる摩周エリア・川湯エリアの整備が求められています。

長期滞在の促進

【表 5】年度別・観光客数および宿泊客数



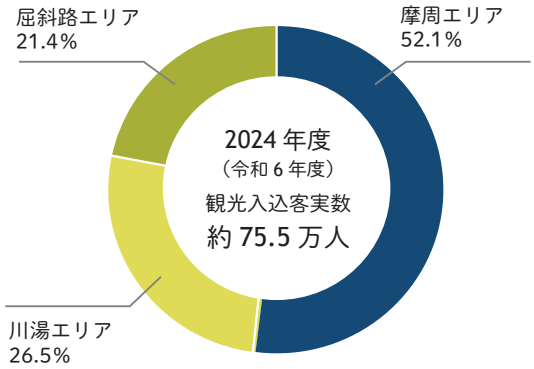
弟子屈町を訪れる観光客（入込客数）は、2015 年以降、横ばいで推移しています。一方で、宿泊客数は減少傾向にあり、日帰り旅行者が増加していると考えられます。

また、コロナ禍収束後に観光客入込客数が増加している状況と比較しても、宿泊客数は依然として伸び悩んでいます。コロナ禍に、宿泊施設の閉館などによる宿泊キャパシティが減少したことも課題のひとつとして挙げられます。

今後、地域にもたらされる経済波及効果を高めるためには、長期滞在を促進する施策が求められています。

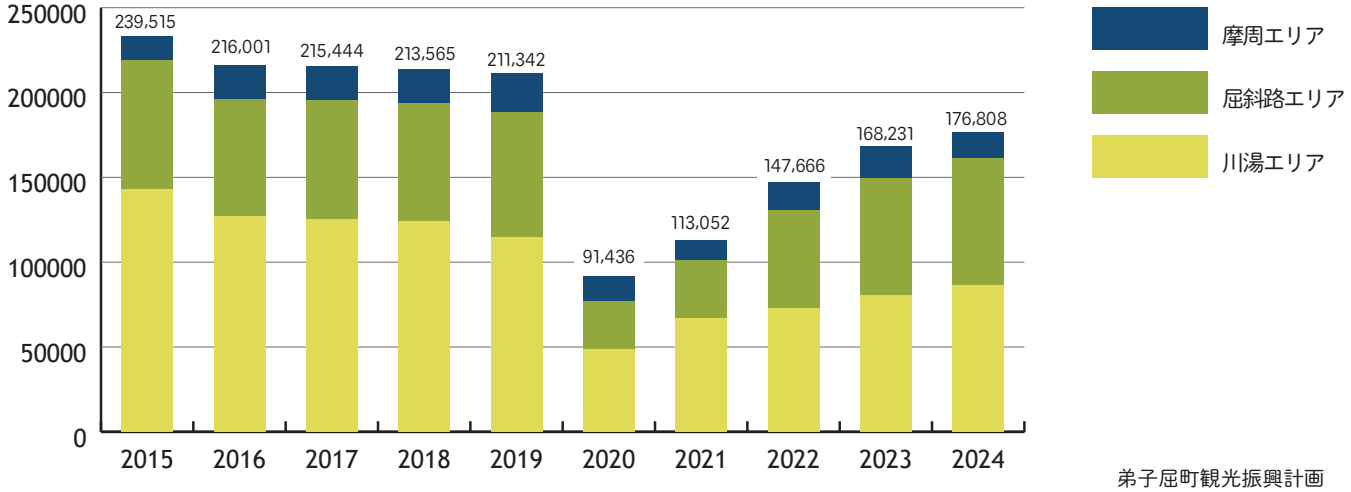
摩周エリアに加えて川湯エリア・屈斜路エリアへの誘客

【表 6】エリア別観光客入込数（2024 年度）



弟子屈町を訪れる観光客は、摩周エリアに訪れる客が最も多く、つづいて川湯エリア、屈斜路エリアとなっています。摩周エリアは日帰り客が多く、川湯エリア、屈斜路エリアは宿泊客を含む割合が高いものの、いずれも減少傾向にあることが分かります。 摩周エリアの魅力向上や施設の整備を図るとともに、川湯エリアを中心に宿泊客・長期滞在客を受け入れるための再活性化が必要です。

【表 7】年度別宿泊客延べ数推移（弟子屈町全域・各エリア） ※外国人を含む



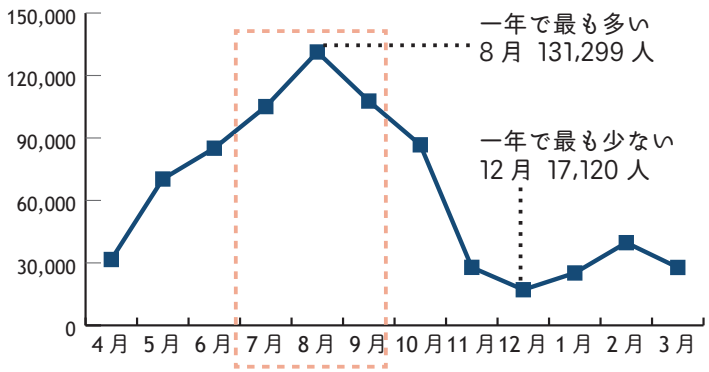
課題 3

弟子屈町の観光は夏のピーク時に集中しており、結果的に観光事業者の繁忙状況や自然・文化資源への負荷にも偏りが出る構造となっています。そのため、年間を通した分散、富裕層も含めたインバウンド客による来訪の平準化が求められています。

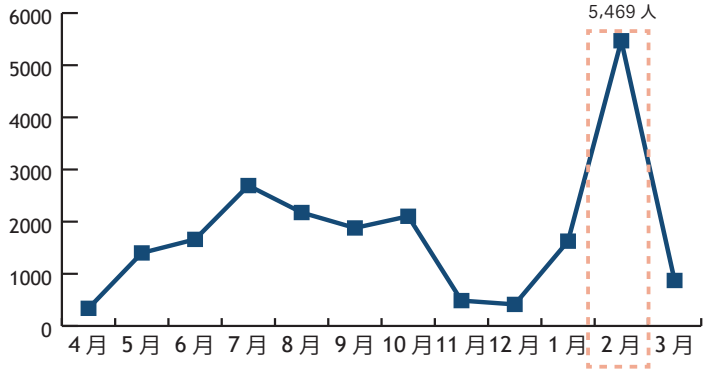
観光需要の分散化

弟子屈町を訪れる観光客数を月別にみると夏季に集中していることが分かります。より持続可能な観光地域づくりに向けて、夏季以外の誘客数の底上げを図るとともに、年間を通して観光産業が活性化することが大切です。

【表 8】弟子屈町月別観光客入込数（2024 年）



【表 9】弟子屈町月別外国人宿泊者客延数（2024 年）

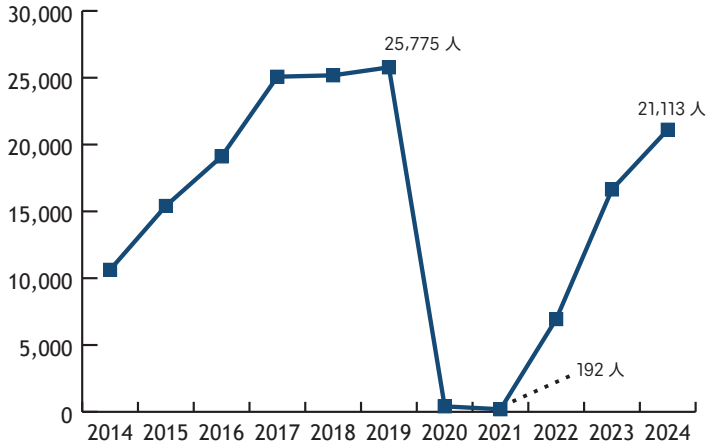


インバウンドの取り組み

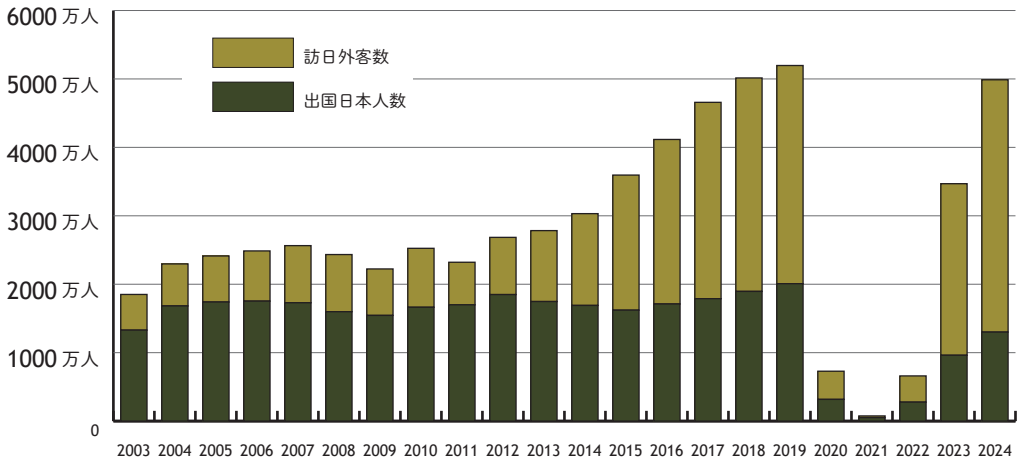
弟子屈町への訪日外国人客数は、コロナ禍収束後、急速に回復しています。さらに、2024 年には、国内旅行市場が閑散期となる 2 月において、外国人旅行客数が年間で最も多い結果となりました。

今後、季節ごとの入込み客数の平準化を進めるにあたっては、冬季観光の活性化に加え、日本全体のインバウンド市場の回復を背景とした、外国人旅行客に向けた取り組みの強化が重要です。

【表 10】弟子屈町の年度別外国人宿泊者数の推移



【表 11】全国の外国人旅行者数・出国日本人数の推移（参考）



「出国日本人数の推移」（観光庁：https://statistics.jnto.go.jp/graph/#graph--outbound--outgoing--transition）
「訪日外客統計」（観光庁：https://www.jnto.go.jp/statistics/data/visitors-statistics/）　をもとに作成

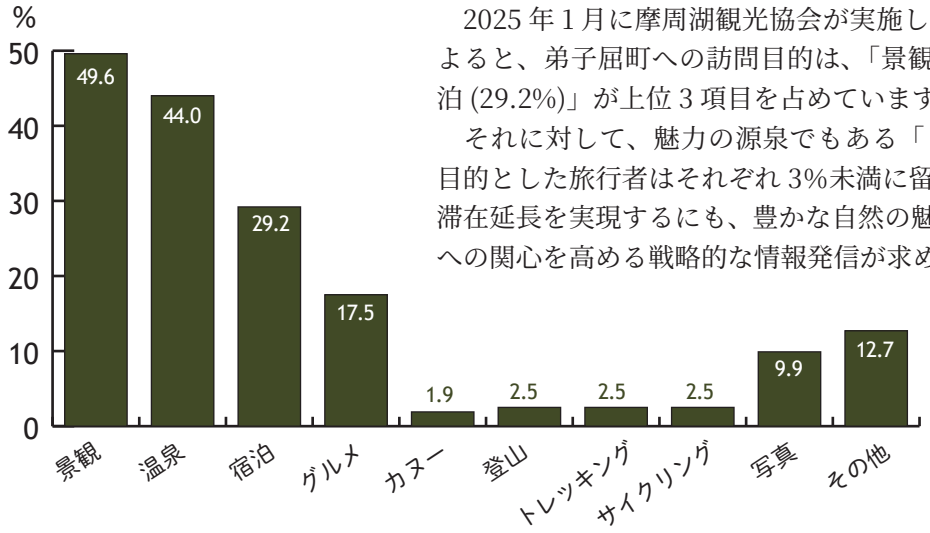
2003 年に 1,330 万人であった日本人の出国者数は、その後、比較的緩やかな増加にとどまりました。一方、2003 年に 521 万人であった訪日外国人旅行者数は急速に増加し、コロナ禍収束後も順調な回復を見せ、2024 年には 3,687 万人へと大幅に増加しています。

課題 4

弟子屈町には素晴らしい景観や温泉のほか、豊かな食やさまざまなアクティビティなどがあります。しかし、現状では多くの旅行者がその魅力を十分に体験しきれていません。まず「弟子屈で何ができるか」を分かりやすく伝え、人々の興味を高める情報発信が重要です。魅力を知り、楽しんでもらうことで、町での滞在時間を延ばし、満足度や消費額の向上に繋げる好循環を作っていくことが求められています。

弟子屈らしい魅力の認知向上を図る情報発信

【表 12】弟子屈町への訪問目的（2025 年）



2025 年 1 月に摩周湖観光協会が実施した「弟子屈町のイメージ調査」によると、弟子屈町への訪問目的は、「景観 (49.6%)」、「温泉 (44.0%)」、「宿泊 (29.2%)」が上位 3 項目を占めています。

それに対して、魅力の源泉でもある「自然を楽しむアクティビティ」を目的とした旅行者はそれぞれ 3%未満に留まっています。消費単価の向上と滞在延長を実現するにも、豊かな自然の魅力を活かしつつ、アクティビティへの関心を高める戦略的な情報発信が求められています。

観光消費額の拡大

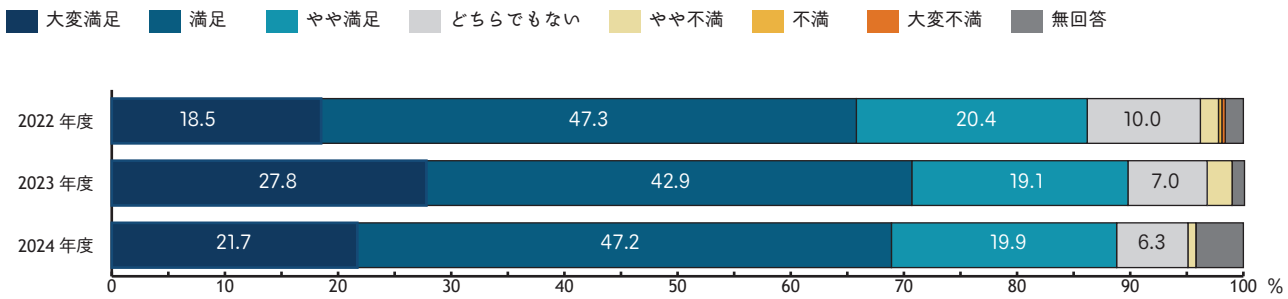
水のカムイ観光圏（釧路湿原・阿寒・摩周）の調査報告によると、2024 年度における 1 人あたりの広域全体の平均消費額は 49,789 円です。そのうち摩周エリアの平均消費額は 50,194 円となっており、地域全体の平均を上回る結果となりました。

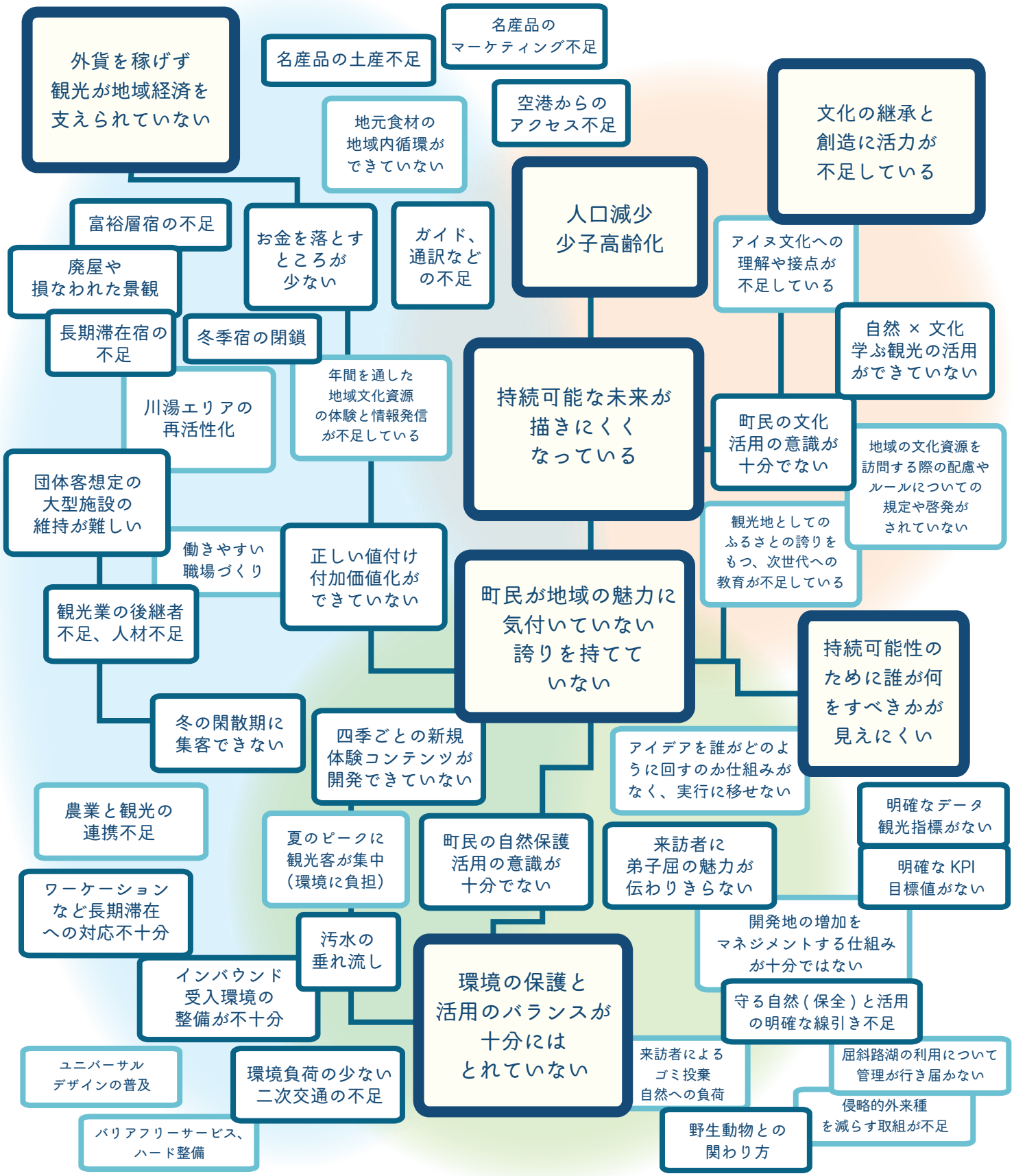
特に消費額を押し上げているのは「宿泊客」であり、宿泊を伴う旅行者の消費額は、日帰り客と比較して約 2 倍の水準となっています。このことから、消費額の観点においても、日帰り客ではなく宿泊客の獲得が重要であることが明らかです。

来訪者満足度の維持・向上

水のカムイ観光圏（釧路湿原・阿寒・摩周）の調査報告によると、2024 年度のエリア全体の『大変満足』の割合は 23.5%（2020 年度 18%）であり、摩周エリアは 21.7%（2020 年度 15.4%）となっています。2020 年度と比較すると満足度は改善傾向にあり、今後もエリアでの滞在に満足し、高く評価してくれるファン層を創出していく余地があることから、満足度向上にはさらなる伸びしろがあるといえます。

【表 13】来訪者満足度調査結果（摩周エリア：2022-2024 年）



弟子屈町の観光が抱える課題の全体像

前期計画策定時に、弟子屈の観光事業者やてしかがえこまち推進協議会とのワークショップなどを通して「持続可能な観光地域づくり」という観点から現状の弟子屈が抱える多様な課題を抽出しました。これに、後期計画策定にあたって実施したアンケート調査の結果を追加したものが以下の図です。